新しい「知のクラフト」へ

次の時代に向けて差し出す本

鼎談 奥野克巳×石倉敏明×清水高志『Lexicon 現代人類学』(以文社)

清水高志 鼎談

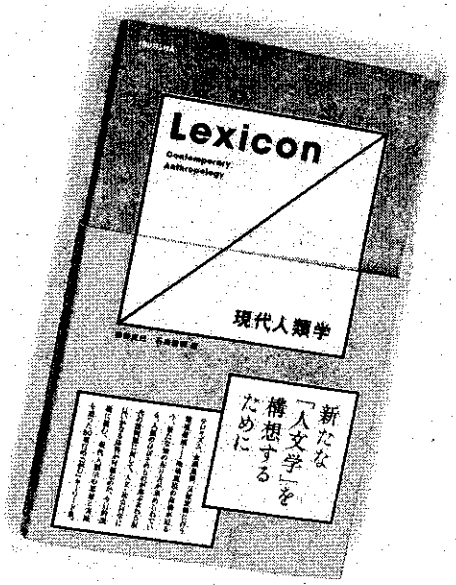
SHIMIZU Takashi 東洋大学教授・哲学

奥野克巳

OKUNO Katsumi 立教大学教授・文化人類学

石倉敏明

ISHIKURA Toshiaki 秋田公立美術大学准教授・芸術人類学



▼奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』2・15刊、四六変形判二二四頁・本体二三〇〇円・以文社

奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』が以文社から刊行された。コンパクトな一冊だが、ぜひ手にとって目次を眺めてみてほしい。未知の世界がまだまだ広がっている」ことに驚きを禁じ得ないはずだ。本書をめぐって、編者の奥野、石倉両氏と、本書に参加した哲学者の清水高志氏に鼎談していただいた。(鼎談日・3月2日、東京・高田馬場にて、浪越巧・本紙編集)

総合的な学知としての人類学へもう一度戻す

奥野 二〇一六年から「マルチスピーシーズ人類学研究会」で、人間と他の生物種を視野に入れながら人間について考えているところです。それは、ここ五～一〇年ほど、アメリカで盛んに行われている研究です。最近、複数の方々から「人類学はいまこんな研究をしているのか」と驚かれました。彼らが抱いている現在の人類学の印象は、大きく二つあるようです。一つは、かつては輝きを放っていたけれども、勢いを失った学問というイメージです。これはいわれのないことではありません。ポストモダンやポストコロニアルの、ひたすら自己反省を続けてきたこの四半世紀に輝きを失ってしまったというイメージを持たれています。もう一つ、新しい「マルチスピーシーズ研究」や「存在論的転回」や「パースペクティヴィズム」などについては、ほとんど知られていない。こうした議論がいま、人類学内外で沸騰しているように感じられるのですが、それが人文知、人文学全体には届いていないように思えます。

石倉 九〇年代以降、人類学に対してある種の誤解があったように思います。それは、未開社会や狩猟採集社会といった「アルカイックな」社会が全世界で縮小しつつあり、そこで人類学が対象とするものを失っていったという誤解です。もう一つは、人類学者はある地域に出かけていって、彼らの現実を彼らの視点から理解し書きますが、どういう権限でその表象をしているのかという批判があり、それに対して人類学者は様々な工夫をしたにもかかわらず、現実を見失い、一種のテクスト理論として人類学が矮小化されていったという誤解です。しかしこの間にも、人類学の方法を刷新していった人たちがいます。例えばブリュノ・ラトゥールです。二〇世紀の人類学は、ある地域の人間集団を同質的なグループと考えていました。しかし二一世紀になると、ある地域の人間の生命の状況は、決して人間集団だけで成り立っているのではないという理解が一般化します。例えば犬や猫や家畜動物、植物や野生動物、あるいは地質学的な状況といった、ヒューマンとは異質なカテゴリーとの関わり合いが社会的な集合をつくっていくという、新しい認識が生まれました。その大きな動因の一つとなったのはラトゥールの「実験室の人類学」や「科学人類学」であり、またそれに影響を受けた対称性を持った人類学でした。こうした潮流が、非人間的転回、あるいは人間的なものを超える「人間以上の人類学」という新しい問題系を発見しつつあります。また、新しい形而上学の定義が人類学から提案され、哲学者との間で対話が生まれています。でもこれがどれだけ大きな転回なのかは、まだ十分に他の領域に伝わっていません。

奥野 人間と人間以外の存在を扱う学問として成長してきている人類学のあり方は、二〇世紀後半の文化人類学の肥大化の反動ではないかと思います。「人類内部の差異」を扱う学問としての文化人類学が、「文化相対主義」を引っ提げて肥大化してしまった。アメリカの人類学は二〇世紀初めにフランツ・ボアスによって築かれましたが、それは形質人類学、考古学、文化人類学、言語人類学の四領域を扱う、人間・自然の包括的な研究でした。ボアスは言語の研究をして、言語そのものが相対的に存在することを発見し、相対主義は人類学の大きなテーゼになりました。それがやがて文化人類学の中に入り、戦後に大きな力を持つようになったのです。フィールドワークが制度化され、クリフォード・ギアツに至っては文化を解釈するという大きな目的のもとに異文化を理解することが主題化され、それが私たちが知っている人類学になってしまった。二一世紀になって、総合的な学知としての人類学へと、もう一度戻していこうという揺さぶりが出てきたんだとも言えそうです。

石倉さんが述べてくれたような二一世紀の人類学の変容の過程は、われわれが住んでいる現代世界の変化にも関わるのだとも思います。最近、こんな経験をしました。ファミレスで三〇歳くらいの男性と、それより若い男性が話している。いまやネットやスマホがない状況は考えられないが、そうした時代には逆に人間の内面性が大切になってくるのではないか。そのあらわれがSNSで、写真をアップして「いいね」をもらって、内面性を「見える化」しているのではないかと。大きく変わりゆく世界をどう捉えるかは、哲学を含む人文学や人類学の課題でもあります。近未来の変化に敏感な若者のリーダーとして思い当たるのは落合陽一さんです。彼の『日本再興戦略』では、「百姓」は実は「百の生業」のことだと言っています。百姓は一つのことに特化してやるのではなく、横断的に様々なことをやる人たちだったんだと。あるいは、遠くない将来に車の自動運転が現実化する。自動車産業は、車の乗り心地などを考えてきたけれども、コンピュータ・テクノロジーが高度化する中で、車を通じて社会と人間の新しいあり方を提起しなければいけないと落合さんは言います。日本の歴史や社会の構造を踏まえて、新時代の処し方を語っています。聞くところによれば、清水さんは落合さんと本を出す計画があるとのことですが、現代世界に人文知や人類学がどう関わっていくべきだと思いますか？

清水 いま人類学の外見上の退潮という話がありましたが、それには哲学にもおおいに責任があると思います。哲学と人類学の関係がもともと深かったために、その後哲学が内部で複雑に発達させた文化相対論的な価値観や、西洋文明内での自己反省としてのポストモダン思想が、逆に人類学にきわめて深くまで入り込んでしまった。日本でも八〇年代後半までは、丸山圭三郎や柄谷行人など、いくつかの分野を跨いだ人たちが横のつながりを持って華やかに活躍していたし、ニューアカデミズムと呼ばれたムーブメントもそうした土壌に支えられて開花したと思います。しかし九〇年代以降、諸学問は急速に分裂していって縦割りになってしまって対話が途絶えました。ポリエモンの『多動力』という本がヒットしていますが、現在では縦割りの社会構造はもはや産業レベルでも成立しなくなってきていま

す。ホリエモンは例えばその本で、三つの肩書きを持てば、あなたの価値は1万倍になると言っています。ある一つの学問や専門に十年専念すると、あなたは百人に一人の人材になれるだろう。二つやれば一万人に二人。三つやれば、百万人に一人なはずなんですが、本の見出しには「1万倍」と書いてある(笑)。それはそれとして、これは正しいと思います。いくつかの分野をミックスしながら、かつての学問は創造を行ってきた。例えばマルセル・モースは宗教と社会学、人類学をやったし、あるいはガブリエル・タルドのように社会学と心理学の開拓者であったりとか、ウィリアム・ジェイムズが心理学と哲学のどちらにも大きな業績を残すなど、二つ三つやっている人はクリエイティブな仕事をしているというのが本当だと思います。しかしそうした流動性が様々な分野でなくなってきていて、弊害を生んでいる。

とはいえ、そうしたかたちはいままた劇的に崩れてきたと思います。哲学でもグレアム・ハーマンやカンタン・メイヤースなど、人間の文化を相対化するだけではなく、自然やモノも同様かのものとして捉えられないかという考えが出てきています。これは実際に、人類学の多自然論と連動した動きです。そこにおいて人類学は早期に、強力な言説を形成していると思います。例えばマリリン・ストラザーンの再帰人類学批判は、実に見事なものですね。ポストモダン的な文化相対論では、文化を相対化する媒体のようなものがあります。様々な文化を跨いだ旅人のような存在がいて、その人はどの文化にも完全に属しているわけではないけれども諸文化を相対化できる、といった設定が採られていましたが、しかしストラザーンはいろんな文化をつないだり相対化する媒体として、《道具》やモノを採り上げ、文化が部分的につながったり分かれたりすることを語っていました。

こうした交錯するような運動が、学問全体のうちでもすでに起こっていると思います。さっき奥野さんも触れられた落合陽一さんは、「デジタルネイチャー論」というを展開しています。彼は「いま、コンピュータは人間のかたちをしている」と言うんですよね。人間の感覚に合わせたものを擬似的に再現するとか、そうしたバイアスでいまを捉えているけれども、人間が全然感覚できないものをモノから引き出してくることもできると落合さんは言います。逆にそれを数理モデル化して、人間が見たらどうだけど、コウモリが見たら全然違うといったようなものをシミュレーションとして出していく。落合さんがメディアアートでやろうとしているのはそういうことです。従来ならありえないものが出てくることと、人間のパースペクティヴとは違うものがいくつもあることを、数理モデルと実際のモノの双方で追求していく。それらが交差し合いながら、もはやネイチャーそのものも変わってしまうというのです。

それは人類学が、非人間が世界を捉えるパースペクティヴを問題にしていることと(パースペクティヴィズム)と非常に近いのではないかと思います。デカルト以降の科学は、物事の筋道を順序立てて説明する鎖のようなモデルを持っていましたが、コンピュータ・サイエンスが発達してくると、もはや筋道自体がわからなくなっている。ディープ・ラーニングの結果、アルファ碁が変わった手を打ちますが、それを人間は必ずしも理解できない。人間の知覚やパースペクティヴを超えたかたちでアウトプットされたものから、さらに別様にアウトプットされたものへという変化が、これからわれわれの眼前に出てきて、世界についての考え方を変えていくと思います。

近代のモデルは、われわれの古くからの文明のものとはだいぶ異質なものを積み上げた独特なものでしたが、それが崩れたときに出てくるものは、ひょっとしたらもっと古いものなのではないかという予感があります。例えば仏教やアニミズムといったものが、自然科学やテクノロジーが発達した末に、かえって出てくるのではないかと思っています。その新しい局面を、ただ「馴染みがない」と捉えるのではなく、一種の快や解放として捉えながら、様々な領域で二〇世紀モデルの見方(例えば社会学)を変えていく必要があるのではないかと考えています。

奥野 人類学の退潮は、一人で悶々と悩んだことの必然的結果だったのですね(笑)。さて、清水さんが執筆した「34 交差する現代思想と文化人類学」(P148)ではメイヤースの相関主義批判から説き起こし、ストラザーンに言及しています。再帰人類学は複数の文化をつなぐ媒体となって断片的に文化を提示するだけだったのが、モノを取り上げ、それを、集団をつなぐ媒体として見て、部分的につながっていく様を描くことで、人間主体ではないものを中心とする理論を構築する可能性がストラザーンには見られるのだと書かれています。哲学者である清水さんを経由して、ストラザーンをわれわれは新たに理解することができます。その次の項目「35 虚構と実在」(P152)は

人類学の目的は、私たちの世界を多元化すること

上妻世海さんが書いていますが、世界を「二つの実在」と「複数の虚構」というかたちで捉えた上で、多文化主義を説明してくれていますが、これも人類学外からの視点が入ることで抽象度がいっそう上がって、非常に新鮮でした。

石倉 人類学者が使うロジックには、非西洋の知の体系を西洋の哲学的な文脈と比較したり、様々な学問の知識を応用したりするようなDIY的な要素、あるいは「百姓的」というか、クラフトビールなどで使う「クラフト」的な側面があると思います。人類学者は哲学的なことを語るとき、必ずしも哲学的なフォーマットや制度に則って語るわけではない。自分なりにプリコラージュしていく語り方は、一種のクラフト哲学になっているのではないか。各地の集団が自分たちの思想として語っていることを、人類学者が仲立ちになることによってつなぐことができる。世界そのものの多元性を扱う「百姓」として、世界を多元化していくことができるのではないかと思います。ヴィヴェイロス・デ・カストロが言っていることですが、人類学の目的は他者の世界を説明することに尽きるのではなく、私たちの世界を多元化することだと。ここで言われている「私たちの世界」とは、人新世という次元であり、「デジタルネイチャー」の世界であり、鉱山の採掘権をめぐってアンデスの先住民とグローバル資本がせめぎあっている世界、つまりさまざまな他者がせめぎ合う「現代」です。他者の社会を説明するだけでなく、世界そのものを多元化していくこと、それが、人類学が哲学などと越境しながら見出し始めていることです。ティム・インゴルドも同様に、人類学はいかに民族誌を書くかという学問ではない、人類学は世界における人間生命(human life)の状況と可能性をめぐる探究なのであると言っています。これは、民族誌学と人類学は手段と目的の関係ではなくて、弁証法的、有機的に結びつくべきだという提案でもあり、人類学の普遍性を取り戻そうという宣言でもあります。そこにおいて人類学と哲学が対話する回路が拓かれつつあるのではないかと考えます。

奥野 昨年、清水さんは『実在への殺到』を出版されました。その第一章でヴィヴェイロス・デ・カストロのパースペクティヴィズムを取り上げ、哲学と人類学が接近して、近代の知のあり方を転倒させる可能性に触れています。ミシェル・セールの準一客体論、ラトゥールのアクターネットワーク論などは、ポストモダンまでの西洋思考を相対化し、現代社会のあり方に再考を迫る強度を秘めていると清水さんは述べています。また、本書で清水さんは、フィリップ・デスコラの単文化主義的なアニミズム論を踏まえて、「24 岩田慶治のアニミズム論」(P104)を執筆しています。清水さんにとって、人類学の存在論的な転回が持っている可能性についてもう少し教えてください。

清水 現代の哲学でも新しい動きはどんどん出てきています。モノから見たパースペクティヴはどうなっているのだろうとか、そういうことを語ろうとすると、『実在への殺到』もそうなのですが、私たちでもやはりプリコラージュ的になります。民族誌が存在論のかたちをとることは本当にあるんだと、哲学の側からも歩み寄って言わなければいけないと思っています。例えば奥野さんが監訳者の一人になられている、エドゥアルド・コーンの『森は考える』にも大きな刺激を受けました。

哲学と人類学は偶然接近しているのではなく、いま共通の母胎が見えつつあると思います。一つはセール、ラトゥールから来ているアクターネットワーク論です。もう一つは実は、プラグマティズムですね。グレアム・ハーマンのモノの哲学はハイデガーから出てきていると言われますが、ハーマンは英米圏の人です。英米圏のハイデガー理解では、ハイデガーの道具論をプラグマティズム的に解釈する流れがずっとあり、それは主体が能力を拡張していくという方向に偏っている。ハーマンはそうは考えないんですよね。例えば駅に屋根つきのプラットフォームがあるとして、これは悪天候に配慮した存在であるとハイデガーは言ったりします。では、屋根つきのプラットフォームが特定の悪天候に配慮するとは、デザイナーが考えたことでしょうか。必ずしもそうではない。人間を回路から外して、モノの連関だけでもこうした「持ったえ」は解釈できるのではないか。例えばハンマーでカンカン叩くとき、ハンマーは手に馴染んでいるから、使う人は何も考えない。その場合のハンマーをハーマンは「脱去したもの」と呼びます。これは「信頼」です。地震でも起こらない限り、自分を支える大地はある。脱去とは、モノとモノとが連関し合いながら、持ったえつつあって、信頼があるということです。

この「信頼」を信じてしまっていいかと言うと、主体中心ではなくモノ側に舵を切っているけど、ハーマンはやっぱりそこはプラグマティックに肯定しているんだと思うんです。そもそも彼の思想はなんら奇矯なものでもないし、哲学がこのように進んでいる方向に、またE・コーンがチャールズ・サンダース・パースを導入して考えていることも見事にリンクしているわけです。パースの「イコン」「インデックス」「シンボル」の考え方だと、イコンはモノから記号に落としたものとすぐわかる。インデックスはイコンとイコンの隣接的関係です。そうすると、インデックスという記号の中には既にイコンが複数入っているわけですね。そう考えると、パースペクティヴィズムの「相互包摂」の意味が初めて明らかになるところがあると思います。私と動物が互いに生存を賭けて推論するとき、相手の推論の中に自分は記号として包摂されているし、そうしてまたそれが私に実際に働きかけてくるわけです。人類学がパースやプラグマティズムと接近していくのはすごくよくわかります。さらにそこを発展させるべきです。

奥野 本書の「37 言語の存在論」(P160)と「38 記号論と人類学」(P164)は、言語人類学者の小山亘さんが書いています。クロード・レヴィ=ストロースはヤコブソンの議論に影響を受け、構造人類学を立ち上げた。ヤコブソンはその後、後期にパースを吸収しますが、パース以降の言語人類学は独自の発展をします。それは、既に存在論だったという見方がされています。パースは、言語そのものの定義を拡大し、イコン、インデックスまで含めた記号過程として捉えようとした。先に触れたポアンソ的な四つの人類学の中で文化人類学だけが肥大化してしまったため、文化人類学者にとって言語人類学は「隣の他者」になってしまっています。パース以降の言語人類学の流れを汲む人類学が今後、大いに期待されるところです。

石倉 いままで民族学者、文化人類学者は自分の調査する民族だけを語っていましたが、ストラザーンはメラネシアの民族誌全体を視野に入れた、新しい記号論を開拓していきました。人類の大きな集団的カテゴリーの思想を扱うような新しいパースペクティヴが開かれ、そこで世界思想としての人類学が立ち上がってきています。その中で再び「言語の存在論」の重要性が見出されている。ニューアカの時代に行われたことも、記号論の次の展望をクラフト的につくっていくことだったでしょう。山口昌男さん(〆)

鼎談 奥野克巳×石倉敏明×清水高志 奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』(以文社)をめぐって

(ア) が文化記号論を開拓した後に、中沢新一さんが儀礼論やサーカス論など、民俗学や記号論、ポスト構造主義の成果をつなぎながら、新しい人類学を作り出していました。これはその後、最近の「野生の科学」や「レンマ学」として展開されています。

清水 本書でも書いたのですが、岩田慶治さんはよく「遠景と近景」という話をします。人間の主体が様々な現象をつないでいくのではなく、風景の中に入れ子になってまた風景があるということです。近景は人間と環境が融和してある生活空間ですが、でも遠景も、近景の中にすでに入り込んでいる。モノが媒体になると、「大きさ」や「スケール」の問題が意味を持たなくなるんです。こういう相互包摂テーマは、ストラザーンのメラネシア民族誌という幅広い舞台設定にもあるし、マルクス・ガブリエルのような現代哲学にもある。もっともガブリエルは、すべてを一方的に包摂するような「世界」はない、と逆説的に言ってしまうわけですが(笑)。

石倉 スケールの問題は、自然に内在する記号過程と人間的な記号過程をつなごうとするときに必ず出てきますね。

生命そのものがブリコラージュだ

石倉 ところで、ニューアカとは何だったのかと振り返るとき、リスクをとりながらも異分野を横断していくことへの今日的な要請は確かにあります。それをかつての流行と考えるのではなく、それぞれの領域で新たに連続線を引き直すことが必要とされていると思います。

清水 機動的に時代に学問が対処するためにも、サバイバル戦略としてかつてのニューアカのように、やはり横断的にやっていかなければならないと思いますね。各分野は、逆に単独ではもはや生き残れないと思います。

石倉 二〇〇〇年ごろから空気が変わってきたような気がします。異文化を知る方法としての人類学という、大学の一般教養的な目的から、人類そのものを知る方法というように、人類学に対する要請が変わってきた。ヒトゲノム計画やDNA分析、脳科学の進展といったことがあっても、人間のことがわかっていないではないかという反省もあったと思います。それでもわからない現生人類の「心」という問題がある。そこで認知考古学や文化人類学や精神分析などを組み合わせながら、新しい「知のクラフト」ができてきたんだと思います。

清水 文化人類学、哲学、アート、環境論、テクノロジー、また経済社会はすでに連動する流れが見えてきました。これからは、それがモノや自然を含んだ新しい政治思想へと発展していくんじゃないかという予感が僕にはしますね。近代が終わって、また自然の捉え方は、むしろかつての天台本覚思想のようになっていくのではないでしょうか。

石倉 例えばエリザベス・ポヴィネリのいう『地―存在論』、または宇宙論的な政治思想という問題が現れてきましたね。オーストラリアでの採掘権の争いの中で、ある人たちにとっては聖地であるところがマンガンの鉱脈であるということで、政府が採掘権を与えた業者が入ってくる。土地の存在論同士がぶつかっていきます。そこで人類学者が現地の声を翻訳し、生命と非生命の境界を見直すという役割を果たす。

先ほどから人類学の変化について話していますが、世界を観察する場所として考えるアプローチから、二一世紀には共通世界をともにつくっていく、創作的、制作的アプローチが出てきました。これは確実にアートの世界で人類学者が要請されるポジションです。

清水 制作論という観点は、非常に重要ですね。『実在への殺到』では、最後のほうで西田幾多郎の制作論について書いています。モノや環境の問題と、制作ということは西田にとっては切り離し得ない問題でした。

石倉 人間がこの世界にどう位置づけられるのか。人間が非人間と一緒に制作をしているというコレクティブのあり方ですね。かつてはホーリズム的な同質な集団性が前提にされたかもしれないけれど、いまは異質なコレクティブとしてある。

清水 ホッブズの時代の「リヴァイアサン」から、地球やモノというエージェンシーを含んだ「ガイア」へと、今後は全体概念が変わってくると思います。人間集団が一斉に同じ方向に行くというのがリヴァイアサン的なモデルでしたが、それがいまやノンヒューマンも含めて全体環境を考えなければいけないところに来ています。

石倉 本書41 「音と身体」(P176)ではバーニークラウスに言及されています。クラウスの議論では、三つの基本音源としてジオフォニー(非生物による自然の音)、バイオフォニー(人間以外の生物が発する音)、アンソロフォニー(人間が出している音)が考えられています。ハイデガーが言っている、人間の世界は開かれていて、動物のそれは貧困であって、鉱物は閉じているという世界性の三層構造をシャッフルして再配置していくときに、考え直さなければいけない三つの次元ではないかなと思います。

ミシェル・セールはヒューマニティ(ユマニテ)を考えるときに、深い意味で記号に溢れた実存のことをユマニテと呼ぶのであって、これを一三〇〇年くらいのスパンで考えてはいけないんだと言います。つまり、二三〇億年のビッグバンからの歴史の中にヒューマニティがあるんだと。

清水 セールは、情報を受けたり発信したり加工したりするのは、人間や生物だけがすることではないとよく言っていますね。広い意味での知性の担い手がもはや有機体である必要はない。科学のレベルで実際に拡張していっている。コンピュータを通して数理モデルに落とせば、別種の知性や別種のパースペクティヴによって捉えられる、別様なネイチャーがさまざまに存在し得る。その「大いなる物語」に気づけよと。

奥野 その意味で、本書で面白い問題提起をしているのが「26 考古学と人類学」(P142)の石井匠さんです。考古学は意味のある石しか扱わず、何でもない石は扱ってこなかったと批判します。人間中心的に地質を見ていた。「宇宙のマジョリティは石であり、生命はマイノリティである。石が無くなれば生命は存在しえないが、生命が消滅しても石は存在し続ける」(P113)と。

人類学が人類内部の差異ではなく、われわれの共通世界を探るという方向に二一世紀になって変わりつつあるという話がありました。「49 複雑だった人類の進化」(P208)が海部陽介さんによって書かれていますが、人類学はもともと現生人類までの進化の過程という考え方を持っていたはずです。また、マルチスピーシーズ民族誌では、「human-beings(人間―存在)」ではなく「human-becomings(人間―生成)」、つまり他の存在においてつくられる、生成する存在であると考えます。

本書「6 今日のブリコラージュ」(P30)で出口顕さんが書いていますが、ブリコラージュは、潜在的な有用性を見出し、それをうまくつないでいく具体の科学、野生の思考としてレヴィ=ストロースによって取り出されたのですが、それは人間だけに限定されるのではなく、生命の進化とも関わっていて、DNA配列の四つの塩基もブリコラージュ的にやってきた、つまり生命そのものがブリコラージュなんだという見方は、ある種のクラフトですよね。

清水 進化には、受動的に淘汰されたからこうなった、と絶対に言えないものがありますよね。例えば蟻塚は、それをつくらなかった当事者の一匹の蟻が死ぬわけではない。今西錦司の進化論はそうした側面についても独特の思索をします。生物同士が寄り添ってシンクロする関係を可視化する、それを今西は「カルチャー」と呼びますが、それがあるとき変わるべくして変わることがあると言う。サルたちがいま直立して立とうという感じで、急に立つ。奇矯な理論とも言われましたが、何かモノがあるとき、それを捉えるパースペクティヴが生物によって全く違うとか、ストラザーンが言うようにある道具が部族ごとに違う人間の布置をもたらすということも、この「カルチャー」の変化ですよね。そしてその変化には、必ずしも合理性はなく変わっていくこと自体が重要であると。

過去からの受動的影響ではなく、自発的な変化。「未来から来る」ということだと思いますが、これはいままさに注目すべきテーマだと思います。メイヤスーも「到来する神」ということを述べています。禅で、「朕兆未萌の自己」という言い方がありますが、自己はまだ到来しない、向こうから来るということです。その変化に合わせて、かたちが変わっていく。進化もそんなもののなんじゃないか。

奥野 そろそろまとめに入りましょう。本書をどう読んでもらうのがいいでしょうか。面白い思われた項目などはありますでしょうか。

清水 「19 捕食」(P84)、「20 可食性の人類学」(P88)が面白かったです。「食べる」、「捕食」は現代のキーワードだと思います。なぜかというと、主体が一方向的に様々な現象やモノを統合していくモデルから変わって、複数のものを受け止める第三項の切り替わりや持続が大事になっているからです。複数のものを包摂する側にモノが立つ。そうした相互入れ子のようなものが哲学でも人類学でも出てきています。それを「食べる」というかたちでとらえてはあらわしている。

奥野 石倉さんはどうですか?

石倉 一つひとつの項目が短いので、ページを偶然開いてみるのがいいと思います(笑)。本書には変わった項目が多いですが、例えば「22 粘菌」(P96)では、南方熊楠のことを語っているようで、実は観察者と生命との関係、あるいは人間的なものとビオス的なものの接点が語られています。また、各項目の最後には、関連する参照すべき項目が提示されていますが、これはつまりテクストの外の世界、現実の世界とつながっていく、その実践へと開かれているということだと思います。それがよくあらわれているのが「23 地域」(P100)です。人類学者は民族名を語ったり、人類全体のことを語ったりしますが、「生活の場」としての地域にはあまり触れません。大事な問題ですが、いままでスルーしがちでした。

さて、本書の目次にあがっている人名を拾ってみましょう。レヴィ=ストロース、エドゥアルド・コーン、アチ・ティン、岩田慶治、デヴィッド・グレーバー。一見偏っているように思えますが(笑)、二〇年くらい経つとこれらがフラットに語れるようになるのではないでしょうか。本書は、次の時代に向けて差し出す本なのではないかと思います。単体として正解を出すのではなく、部分的にそれぞれがネットワーク的につながっていくような主題が本書にはちりばめられていて、どこから読んでもいいように編集されています。ポケットに入れて、どこか気になったところから読んでほしいです。それから、最初から読んだとしても、再帰人類学から永モ・サビエンスまで、そして未知のhuman-becomingsにつながる読みものとしても読める本になっています。人類学を知るために本書を読むのもいいと思いますが、現実に生きている自分の課題に対する接線を本書に見出していただけると嬉しいです。 (ア)